

## 桜蔭中学校二〇二四

### Ⅰ

問一 A 精査 B 定時 C 建前 D 神経

### 問二

それぞれの人が多様な人生を生きる中で発見してきた感情はどれも同じではなく、その人独自の言葉でしか自分の感情は表せないはずであるのに、相手に伝わることを優先して決まりきった言葉を用いて感情を表現することで、感情そのものが他者と同じであるように感じられ、また自分の感情が言葉に収まりきらず、かえって伝わらなくなってしまうと感じているということ。

### 問三

相手がわかることや場を壊さないことが優先される現実のコミュニケーションとは異なり、インターネット上で書く言葉は、コミュニケーションを前提としておらず「わからなくてもいい」と思って自由に表現できるため、身体と結びついた感情に沿った子束を選択でき、自分の存在を感じるができるから。

### 問四

わかってもらいたいという思いから自由になれ、自分のなかの思考回路からあふれだすものを言葉にしていくことができ、そして、読み手に理解されなくても、自分の言葉選びから「異物感」を感じとってもらい、読み手自身の心の奥にある感情に気づいたり、思い起こすことができたと知る瞬間が得られる喜び。

### Ⅱ

問一 A 道楽 B 年配 C 素養

問二 A 足 イ 顔

問三 夫や育ての親が亡くなり、息子に会社を任せられる状況になっていたため、鶴来に居る意味を感じられなくなったことで、新しいことを始めようと決めていたときに、取引先の挨拶回りで偶然名前にひかれて海会堂書店に入ることになった。そこで並んだ船の本を見て、かつて母親から言われた、船に乗って自由にどこへでも行くようにという思うように生きる人生の応援を思い出した。今までの生活と違う生活を求めている時に神戸の元町でたまたま出会った書店で船の絵を見たことも、何かの縁であろうと思い、その社長に興味をもち、会ってみたくなったから。

### 問四

美術の素人であることは、ギャラリーの仕事をするうえで問題だと思い、知識を必死に学んでいたが、社長に知識以上に画家が人生を賭けて描いた作品を発掘し、そこにこめられた思いや情熱を感じとり、一般的な価値観に押されて見えなくなっているものの価値やありように思いを寄せることができるという感性のほうが重要だと教えられ、机上の知識を横に置いて、画家の人物像や描かれた絵画そのものに向きあおうと決意している。

### 問五

育ての親と夫を失ったことで鶴来に「居場所」を失い、新たに神戸の海会堂書店で「居場所」を作り、画家や絵画の「居場所」を自分たちで作っていくようになった、という祖母の半生についての話を聞いて、「居場所」は他者との出会いを通じて互いに必要とされる関係性を築くことで得られる人と人とのつながりが生み出すものであると実感し、人生における縁の不思議さに胸を突かれると共に、自分もそうした縁を紡いでいこうという気持ちが生まれたから。